

学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性 —継続的なアウトリーチ活動の事例を追って—

岡部裕美¹⁾ 鈴木香代子²⁾

¹⁾千葉大学教育学部 ²⁾近畿大学豊岡短期大学

The Possibilities for Education of Music by Collaboration with School and Performer —A Case Study of Continuous Outreach—

OKABE hiromi¹⁾ SUZUKI kayoko²⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

²⁾Faculty of Education, Kinki University, Toyooka Junior College, Japan

本研究は、学社連携で行われた継続的な音楽のアウトリーチ活動について調査を行い、児童の意識や行動の変化、教師の視点などを明らかにし、アウトリーチの教育的意義について考察するものである。調査結果から、多くの児童は生演奏に感動し、CDとは違った魅力を感じ取り、音楽に対する意識や理解が深まった。また演奏家と一緒に演奏したり、演奏家の姿勢を感じ取ることで、児童自身の向上心が高まり、学習意欲が喚起された。それによって授業への取り組み方や落ち着きなど、学校生活における望ましい態度を獲得した。一方、教師も演奏家からの学びがあり、学校現場に演奏家の力を持ち込むことのメリットを確認した。したがって、演奏家と学校の協働によるアウトリーチは音楽教育の可能性を広げ、学校教育の充実につながる事がわかった。今後、アウトリーチはますます重要になり、かつ多様な役割を担うと考えられる。

キーワード：アウトリーチ (Outreach) 学社連携 (Cooperation with school and community)
学習意欲 (Motivation for learning)

はじめに

日本では、以前から“鑑賞教室”という、完成された作品や芸術活動を鑑賞する体験を目的とした活動は多く行われてきた。しかし近年「アウトリーチ」という言葉をキーワードに演奏家たちが様々な場所に出向き、対話や体験を重視した積極的な活動が多く行われるようになってきている。日本においては、社団法人日本芸能実演家団体協議会や財団法人地域創造、財団法人音楽文化創造、各地域の文化施設、各オーケストラ団体、NPOや任意団体などが独自のアウトリーチプログラムを展開しており¹⁾、大学では神戸女学院大学が2001年度から「音楽によるアウトリーチ」の取り組みを開始し、昭和音楽大学が2007年から「アーツ・イン・コミュニティ」プログラムを開始、アウトリーチの定着と学生の育成を目指している。

アウトリーチの先行研究としては林 (2003) が広域的に調査を行い、学校におけるアウトリーチの成果を次のように述べている。(ポイントを筆者が要約した)

- ・子どもは音楽家との交流による楽しい体験や演奏が心に残り、生涯にわたって音楽を楽しむきっかけになる。
- ・教師は、音楽的・人間的視野の拡大、コーディネーター能力の開発、子どもとの関係の変化。(教師が音楽家に学ぶ、音楽家が子どもに学ぶ)
- ・音楽家は、子どもの感受性や創造力から得るものがある

り、社会貢献としての認識が深まる。

林はアウトリーチ活動の定着によって子どもたちのまわりに豊かな音楽環境を築き、音楽理解、音楽家理解によって音楽家を支えるという社会循環を描いている。

しかし演奏家が学校教育との協働を行うためのつなぎ手 (コーディネーター) の人材育成や、アウトリーチ活動を希望する演奏家の確保や育成、アウトリーチを希望する学校や施設等が気軽にオフターできる広域レベルでのシステム構築など課題は多く残されており、財源の確保も困難である。

アウトリーチ活動が盛んなアメリカにおいては、学校教育から芸術の授業が大幅にカットされている関係から、演奏家が社会貢献活動としての使命感を持ってアウトリーチに積極的に取り組んでおり、最近の活動は学社連携としての認識からパートナーシップ・プログラムとも呼ばれるようになってきている。ジュリアードやイーストマンを始めとする音楽大学のキャリアサービスセンターでは、アーティストの巣立ちをサポートするとともに、併設のパフォーミング・アウトリーチ・オフィスにおいて、学校、シニアセンター、病院などでの訪問演奏の取りまとめや指導、評価を行っている²⁾。

また、イギリスではロンドン交響楽団が教育プログラム“ディスカバリー”を1989年から始め、大きな成果をあげている。彼らはこれらの活動を通じて「特別なことを提供できる」「変化をもたらすことが出来る」と述べ、小学校では1年生から6年生まで継続して続ける必要性があると主張している。何故なら音楽の特性に含まれる

連絡先：岡部裕美

「規律」「意志決定」などは、子どもたちにとって必要な事項であり、教育的にとっても価値があると考えているからである³。

我が国の学校現場においては音楽の授業時間数が減り、音楽専科教員を置かない学校が増えるなど、音楽教育の環境が充実しているとは言い難い状況が続いている。2009年に改定された学習指導要領では、言語力、理数力、外国語教育の強化が図られ、基礎的な知識・技能の習得を目指しているが、音楽科は唱歌や和楽器の学習の充実にとどまっており、音楽科の果たす役割に期待する論議も少ないのが現状である。しかし音楽教育によって育まれる感性や情操は知的領域での能力の育成に結びつき、学習意欲を向上させる効果があると考えられる。

例えばリトミック教育の創始者ダルクローズ（1865～1950）は次のように述べている。「第一に、この内的聴取を呼び覚ますことを目指すべきである。それはまた、人格の発達、思考と感覚の連携機構の完成へと自然につながっていく（中略）この教育は、子どもに自分の個性的人格（ペルソナリテ）の獲得をもたらしてくれるはずである。（中略）子どもは、自分の内にある豊かな潜在能力を使おうとする意欲がふくらんでいくのを感じるのである。同じく想像力も発達する。」（2003 p. 122）彼は身体感覚での理解や感じたことを表現する訓練によって様々な能力や意欲が高まり、人格が発達すると論じている。

さらにダルクローズは「あるべき姿の社会が実現して、誰もが自分の周囲の人に知識や技能を伝えることが当然とされる時代に、本物の音楽家、作曲家、アーティストの誰もが、民衆の音楽教育に、日に1時間割いてくれる時代、そんな時代にいたれば、この問題は決定的に解決されよう。」（同 p. 117）と、音楽教育に演奏家に関わることの必要性を指摘している。

古くはコメニウス（1562～1670）が「音楽がそれ自体研究するに値する芸術形式であるだけでなく、倫理的、身体的、そして感覚的に望ましい諸技能の発達に貢献する力を持っている」（ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ, p. 7）と論じたことを鑑みても、音楽教育が学校教育の中で大事な役割を担っていることを忘れてはならない。

高い芸術性と表現力から生まれる「生き生きとした音楽」—まさに人間の内面から湧き上がる感情と内面的な輝き—が聴く者の心を揺さぶる。アウトリーチは、肌で感じ取った感覚によって突き動かされる感動や意欲を生み、知的領域に刺激を与え、子どもたちの可能性を引き出すことにつながるのではないだろうか。つまり演奏家が学校教育との協働においてアウトリーチを行うことは、音楽教育の質を高め、学校教育の充実につながるなど、教育的効果が期待できると考えられる。

本稿では、1年間に亘って継続的に学社連携で行われたアウトリーチの事例を第1部にて報告し、その後の追跡調査を第2部で報告することから、音楽教育におけるアウトリーチの意義について考察することを課題とする。

第1部 学校教育とアウトリーチ

1. 音楽教育における感性育成の意味と目的

日本は比較的質の高い教育が実施されているが、最近では学力低下や学習意欲低下が指摘されている。2008年に行われた文部科学省の第2回全国学力テストの調査結果では、生活習慣と正答率の関係において、ITやテレビなどのデジタルメディアの世界に依存する子どもたちの姿が浮き彫りになった。（2008年8月30日読売新聞17面全国学力テスト結果分析より）

三井（2002）は次のように警鐘を鳴らす。「メディアの利便性が空気のように身近で社会的なインフラになることにより、いつの間にか人々のしなやかな感性が失われ、芸術本来の使命である、形体や色彩に対する鋭い造形力や表現力、生命感あふれる情緒性が損なわれる危険性を内包している。（p. 15）」

三井は、芸術とデジタルメディアの新しい関係に注目し、コンピューターで作られたバーチャルな世界に私たちの感覚が適応し、感性が失われてしまうことを危惧している。現代の子どもたちは物心ついた時からバーチャル・リアリティな体験が身近にあり、実体験が無くても様々な情報に触れている。しかし実体験と、限りなくリアリティの高い間接体験での感動や高揚は、全く別のものである。実体験には自分や相手（対象）が確かにいる（ある）という感覚に加え、作品の持つぬくもり感や生命感などの言葉にならない刺激を肌で直接受けとめている。その中で心を揺さぶられるような体験を積み重ねることによって感性が育つのではないだろうか。いくら芸術的価値の高いものでも感性が無ければ感動もしないし、興味も持てないだろう。

感性の育成は音楽科にとっても重要な目標となっており、2008年に公示された学習指導要領では「表現及び鑑賞の活動を通じて、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を養い、豊かな情操を養う。」と掲げられており、「学校教育は、知性と感性の調和のとれた人間の育成を目指しており、ここに音楽教育における感性育成の意味と目的がある。」と示されている。

また2007年に行われた日本音楽教育学会第38回大会のパネルディスカッション「感動を脳科学する」では、自発、内発的な〈やる気〉が学習効果を高めることが脳科学の知見からも指摘されており、芸術に直に触れさせて感動体験をさせ、やる気を育むことの重要性が論じられた。子どもは、能動性を発揮することで発達が促されるという特徴があるが、感動することで、「凄いなあ!」「そうか、わかった!」という主体的気づきや憧れから自分もやってみたい、伝えたい等の気持ちの高まりが衝動となり、能動性を発揮し伸びていく。

例えばデューイ（1859～1953）は、「子ども自身の経験が好奇心を喚起し、独創力を高め、（中略）強力な願望や目的を創り出す（2004 p. 52）」と述べている。さらに、「絵画と音楽、すなわち造形教育と聴覚教育は、学校で行われるすべての作業の頂上であり、理想化であり、洗練・純化の極点である。（中略）すべての芸術は身体諸器官—眼と手、耳と声とを働かせるものである

(1957 p. 92)。』と述べ、芸術によって培われる感性の育成が教育においては重要であることを示している。

いまや時代の変化によって、教育の状況が大きく変わっている、という認識が必要である。学力向上に関する議論は、子どもたちの意欲を引き出していくために何が重要かをしっかりと考えていかねばならない。生涯学習の時代において、いかに「学び」の本質に触れていけるのか。アウトリーチにはそれらに働きかける要素がいくつも含まれているものと考えられる。

2. アウトリーチ活動の意義

学校教育における鑑賞指導では、「音楽を特徴付けている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズ、音の重なり、音階や調、和声の響き）と音楽の仕組み（反復、問いと答え、変化、音楽の縦と横の関係）を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること（学習指導要領音楽編）」が目標となっており、それらを表現活動に生かし、主体的に楽しく音楽活動に関わることを期待している。しかし従来の授業においては、楽曲を演奏することや要素の聴き取り、知識の習得にとらわれ、音楽そのものを感じ取る体験が希薄であったことは否めない。

神原（2006）は「音楽の学習は、言葉を越えたことばとして、音楽のうねりが醸し出す独特の雰囲気の中で、何らかの意味合いを感じ取ることが重要になると考えられる。子ども自身が、“これ（音楽）はおもしろい”と感じるには、深い感動が必要である。（p. 5）」と述べ、子どもには「クオリティの高い、感動に満ちた音楽体験（同書、p. 3）」が必要であることを示している。

さらに「既存の優れた音楽作品には、さまざまな意味（メッセージ）が込められている。（中略）作品に含まれる音楽的意味を感じ、多様な価値を理解する機会になる。（中略）同時に多文化理解や他者理解を促すチャンスにもなる。」と述べている。（神原2007 p. 18）これらのことから音楽鑑賞においては、知的理解と同時に、感動を得る体験が重要であることがわかる。

アウトリーチでは、演奏家の精神を研ぎ澄ましている姿や息遣い、気迫や柔らかさなど音楽そのものを表現している様子を目の前で捉えながら聴くので、印象の強さはCD聴取とは比べ物にならない。そのような体験を積むことで興味も湧き、音楽に対する聴取力が高まるようになるのではないかと。つまりクラシックに限らず、様々なジャンルの音楽に対して、積極的かつ柔軟な聴き方・捉え方が主体的に出来るようになると考えられる。

茂木（2008）は「音楽を楽しんでいる時に活性化する脳内のニューロンは、人間が生きるために必要な欲動をつかさどる部分と等しいことが判明している。（p. 54）」「音楽の本質というものは、畢竟（ひっきょう）、どのようにしたところで目には見えない。…しかしながら、この目に見えない「何か」が、脳に喜びをもたらし、心身を健やかにし、生命を積極的に全うさせてくれるということが、底知れぬ音楽の可能性と相通じる〈生〉の不思議さなのである。（p. 127）」さらに、「美しい」「嬉しい」「悲しい」「楽しい」…。一瞬一瞬に生身の体で感動することによって、人は自己の価値基準を生み出し、

現実を現実として自分のものに出来るのである。それが「生きる」ということである。だからこそ、本当の感動を知っている人は強い。生きていく上で、迷わない。揺るがない。折れない。くじけない。音楽はそんな座標軸になり得る。（p. 18）」と述べ、音楽聴取時の感動によって引き起こされる心の動き、すなわち脳の働きに注目し、そこから能動的な生命力＝生きる力が生み出されることを示唆している。

特に「生の演奏を聴くことほど大切なことはない。修練を積んだ演奏家たちの心尽くしに、私たちの生が感銘を受け、動き出す。（p. 5）」「音楽における体験の豊かさや感動の深さという点では、「ライブ＝生演奏」に勝るものはない。…脳へサインを送る力というものを考えると、CDやDVDの音は、ライブ演奏を決して越えられないのである。（p. 29）」と述べている点については、アウトリーチで実際の演奏を目の前で聴くことの意味を保証している。

そのような点から考えてもアウトリーチは演奏家が真剣に、本気で取り組むものでなければならない。

3. アウトリーチ活動の実際

トリトン・アーツ・ネットワーク（TAN：2001年創立）は、中央区晴海にある第一生命ホールを拠点とした特定非営利活動法人である。TANは自主公演事業以外にコミュニティ事業として、学校や病院、福祉施設におけるアウトリーチ、地域の企業や大学でのロビーコンサートやサテライトコンサート、弦楽器ワークショップ等を行い、アーティスト・イン・レジデンス⁶（2007年終了）も取り組んでいた。彼らは演奏の質に妥協せず、音楽の力を社会で共有しようと真摯に取り組んでいる。

2002年から始めたアウトリーチは、今では区内の全公立小学校と幼稚園の一部において毎年行われている。しかし、予算と人的資源の不足などから、一校に対し年1回（小学生は4年生を対象に）という形で行われており、これは他の団体のケースでも同じような状況で、「行きずりのアウトリーチ（drive-by outreach）」と言われる所以である。

しかし当時のディレクターM氏は、「生身の人間が生身のものをやるアウトリーチ」に対して、もっと積極的に、継続的に行う必要性を指摘していた。「音楽の持つ特性に耳を澄まして初めて聞こえるものや、生まれてくる感性があるはずだし、創造力や想像力を養っていく為の土壌作りとしてアウトリーチがもたらす意味は大きい。0を1にするだけでは、不十分である。」（インタビューより）と考えていたからである。

またTANには独自のサポーター制度があり、コンサートのプログラム配布・チケット販売等の手伝いからDM発送・データ入力など事務所内の手伝いなどを担うボランティアの人材を抱えており、サポーター主導で行われる事業もある。そこに「アウトリーチ班」と呼ばれる筆者を含むメンバーが数人おり、実際のアウトリーチに同行し、当日の手伝いや報告書作成を行ったり、アウトリーチについての勉強会を開いたりしている。TANはこういった人材を活用しつつ、開かれた存在として活動している。

TANのスタッフとアウトリーチ班、それに過去のアウトリーチ経験からTANに信頼を寄せている中央区立T小学校、そしてアウトリーチ経験が豊かなピアニストTの三者がスクラムを組み、日本音楽財団の助成を得て実現したのが、1年間にわたる「T小学校プロジェクト」である。

実施のねらいは「①小学校の音楽カリキュラムに即したプロフェッショナル演奏家のサポートを試みる ②音楽教育の現場から上がってきた強い要請である、アウトリーチ活動の音楽カリキュラムとの連携を实践、鑑賞型授業と実践型の有機的連携を視野に入れたカリキュラムの今後の可能性、将来性を見極める。」である。(TAN事業実施計画書より)

T小学校プロジェクトの実施概要とアウトリーチの様子は以下の通りである。対象は4年生1クラス33名の児童たちであった。

3-1 第1回【さあ、ピアノのまわりに集まろう】～ピアノ～

演奏：T (ピアノ) 07年6月21日実施 T小学校音楽室5, 6時限

【プログラム】

『くるみ割り人形』より行進曲 (チャイコフスキー、ブレトニョフ編曲) / ピアノのための《あそび》より一チャイコフスキーを讃えて (クルターク) / ホバック (ムソルグスキー、ラフマニノフ編曲) / 音楽絵本『スイミー』～Withベルガマスク組曲より前奏曲 (ドビュッシー) / トルコ行進曲 (モーツァルト) / アンコール曲・愛の挨拶 (エルガー)

【アウトリーチの様子】

(概要を紹介するに留める。2回目以降も同じ。)

大屋根を外したグランドピアノの周りを児童が囲み、Tが鍵盤の模型を使ったり、弦の上に一枚の紙を乗せてピアノを弾いて、紙が細かく震えるのを見せたりして、音の出る仕組みを解説。また手巻きオルゴールを鳴らしてピアノの響板に乗せると、スピーカーを通したように音が大きくなるのを聴いて、児童から「すごーい！」と声があがった。(プログラム：ピアノのひ・み・つ)そしてTが演奏するピアノの下に数人ずつ順番にもぐり、ピアノに触れながら身体全体で響きを体感。児童らは「わっ、すげえ！」と声を上げたり、身体をすくめたりしていた。またTは靴下を手にはめて演奏するクルタークのピアノ曲の楽譜を見せ、実際に演奏してみせたり、ホバックではテーマのメロディを聴きとらせるためにクイズを出すなど、児童たちの好奇心を引き出していた。音楽絵本⁷では、身じろぎもせず集中して聴き入る児童の姿が見られた。最後にトルコ行進曲をタンバリンなどで合奏し、ピアノの特性を知り、体感したことで、楽器の魅力を感じた日だった。

3-2 第2回【リズム！リズム！リズム！】～ピアノ & マリンバ～ プロ奏者によるピアノとマリンバ

演奏：T (ピアノ) / H (マリンバ) 07年10月11日実施 T小学校音楽室5, 6時限

【プログラム】

アフリカンブルース (ロッケンカンプ) / 道化師のギャロップ (カバレフスキー) / おぼろ月夜 (岡野貞一) / インヴェンション へ長調 (バッハ) / ワルツィング・キャット (アンダーソン) / パラゴンラグ (ジョップリン) / G線上のアリア (バッハ) / チャルダッシュ (モンティ) / 剣の舞 (ハチャトリアン)

【ワークシヨップ】他己紹介、詩の朗読「わかんない」「おなら」「あいしてる」「生きる」谷川俊太郎作 (BGM / ドビュッシー：ベルガマスク組曲より前奏曲) / 「生きる」の詩をみんなで考えてみよう (BGM / ロンドンデリー)

【アウトリーチの様子】

前半はマリンバとピアノの演奏と楽器紹介。数本のマレットが、もの凄い速さで動く様子に思わず身を乗り出す児童が数人。そしてバッハのピアノ曲をマリンバとピアノで弾き比べをしたので、表現やニュアンスの違いが良く分かった。「剣の舞」では児童たちはボディーパーカッションで演奏に参加し、リズムや呼吸を合わせることの楽しさを体験した。

後半は椅子を輪に並べてTやH、サポーターも一緒に座り、まず他己紹介を行った。友達とは新たなコミュニケーションの時間であり、演奏家やサポーターともつながりを感じて、グッと身近になれた時間だった。次に詩と音楽のコラボレーションとして、「生きる」の詩を児童の群読と、Tの朗読で応答形式にて行い、詩の雰囲気を保ったまま、ドビュッシーのピアノ演奏につなげた。そうした流れが、児童達の集中力と想像力を最大限に引き出していた。引き続きピアノとマリンバの演奏をBGMに、一人ひとりにとっての「生きるとは？」を書いた。(例：友達と一緒にいること、眠くなること、遊ぶということ…)

3-3 第3回【体も楽器？】～ピアノ & 歌～

演奏：T (ピアノ) / O (ソプラノ) / Tu (テノール) 07年11月9日実施 T小学校音楽室5, 6時限

【プログラム】

アヴェマリア (シューベルト) Sop / 献呈 (R. シュトラウス) Ten. / オペラ『ラ・ボエーム』よりムゼッタのワルツ (プッチーニ) Sop / 漢字のテスト Sop / 小さな空 (武満徹) Ten. / 創作詩『生きる』～アメージング・グレイス (黒人霊歌) Sop・Ten. / オペラ『椿姫』より乾杯の歌 (ヴェルディ) Sop・T / 音楽絵本『スノーマン』(作・絵・音楽：レイモンド ブリッグス)

【アウトリーチの様子】

前回児童達が自分にとっての「生きるとは？」を1文で書いたものを、当日の参加者である演奏家、先生方、TANのスタッフとサポーターのコメントも含めてTが編集し、創作詩「生きる」を作成した。今回も全員で輪になり、一人一人朗読していった。自分を振り返ることや他の人たちの思いに気持ちを重ねること、それらに歌とピアノが合わさり、筆者にとっても感動的な体験だった。また、演奏においては目の前の歌手が身体全体を使って声を響かせて発声している様子が良く分かり、第1回目にピアノの下にもぐって体験した楽器の響きと

ンクさせて考えることが出来る。さらに役者のように演技や音楽に入り込んで表現する様子は舞台上で見るよりはるかにインパクトがあった。

音楽絵本はTのピアノに、ソプラノ、テノールが朗読と歌で参加し、長い作品であったが、前回以上に息を潜めて集中している様子が見られた。

3-4 第4回「共演?競演? 4年生 VS 八重奏」 ～2台のピアノ&チェロ&木管五重奏～

演奏：T（ピアノ）Ta（ピアノ）/M（チェロ）/風の五重奏団（W（フルート）、I（オーボエ）、N（クラリネット）、O（ホルン）、F（ファゴット））08年2月14日実施 T小学校音楽室 5,6時限

【プログラム】

マラゲーニャ（レクオーナ）2台ピアノ/ラメンタチオ（ソッリマ）チェロ/サウンド・オブ・ミュージックメドレー（ロジャース）木管五重奏/動物の謝肉祭（サン＝サーンス、梅本由紀編曲）～踊りと音楽でおくる『M（担任の名前）動物園編』1.序曲とライオンの行進 2.めんどりとおんどり 3.ろば 4.かめ 5.ぞう 6.カンガルー 7.水族館 8.耳の長い登場人物 9.森の奥のカッコウ 10.鳥 11.ピアニスト 12.化石 13.白鳥 14.終曲

【アウトリーチの様子】

2台ピアノの演奏はそれぞれの演奏家のエネルギーがぶつかりあったり、重なりあったり、音楽による会話を見ながら聴くことが出来て、音量も迫力あるものだった。《サウンド・オブ・ミュージック》は連合音楽会で児童らが取り組んでおり、本格的なプロの演奏を身近で聴くという、いわゆる「学び」の基本である。これは児童が経験したこととの関連を感じながら、自分たちの表現との違いがどのようなものか、どうやったらあのような音が出るのか、興味を持って聴くいい機会だった。

また五重奏における他の演奏者と呼吸を合わせる仕草や楽器で歌いあう様子は、CDでは感じ取れない音楽のコミュニケーションであった。そして《動物の謝肉祭》では事前に台本を渡し、1曲ごとに児童のグループにセリフを割り振って、各自練習しておくように依頼しておいた。サポーターも事前に集まり、当日の流れについて綿密に打ち合わせを行った。当日は音楽室を動物園に見立て、児童はサポーターの誘導に従ってグループごとに壇上に上がってセリフを言い、セリフを受けて演奏される曲を壇上で聴き、それ以外の時は自分の席で友人たちを見守り、鑑賞する側になった。（ほとんどの児童がセリフを暗記して臨んでいた。）言葉と音楽のコラボレーションを、出演者と聴衆という二つの立場から楽しみ、最後には全員がその場に立って皆で拍手をしあった。この日、立ち会った校長先生が「今日のみんなは、何だかいつもと違って、背筋がピンと伸びていて雰囲気違いますね。」とコメントするほど、児童らは生き生きと目が輝いており、この日のプログラムを楽しみにして、意欲を持って取り組んでいた様子であった。

3-5 第5回「ホールの響きに包まれて」～ピアノ&弦楽四重奏～

演奏：T（ピアノ）/クァルテット・エクセルシオ（N, Ya（ヴァイオリン）、Yo（ヴィオラ）、O（チェロ））08年2月21日実施 第一生命ホール

【プログラム】

ピアノ五重奏曲より第1,2,4楽章（ドヴォルザーク）/フィドル・ファドル（アンダーソン）弦楽四重奏/テトラス（クセナキス）弦楽四重奏/カノン（パッヘルベル）弦楽四重奏+ハンドベル/ラ・カンパネラ（リスト）ピアノ/リベルタンゴ（ピアソラ）弦楽四重奏/ディヴェルティメントKV157より第2楽章（モーツァルト）弦楽四重奏

【アウトリーチの様子】

サポーターによるチケットのもぎりを受けてホール内に入った児童は、まずピアノのリハーサル風景を2階席で見た。（当日夜は本公演があった。）演奏家が自分の打ち鳴らす音の響きやフレーズを確認しているのは普段は見ることのできない場面である。そして1階席一番前に移動し、今度は弦楽四重奏曲を聴き、それぞれの楽器説明を聞いた後、児童たちは好きな場所を選んで座りドヴォルザークの第4楽章を聴いた。2階席での響きと、1階席での感じ方や、音が空間を伝わって響き合う感じをつかめただろうか。

続いてドヴォルザークの2楽章を聴き終わって移動するとき一人の男子が「悲しいことを思い出した」とボツリと発言。音楽から感じ取ったものが彼の体験と重なったと思われる。担任教諭も、この日初めて弦楽器の音の区別や重なり合う音を認識した、と後日の学級通信に書いていたように、多くの学びと感動があったと思われる。

《ラ・カンパネラ》では、ピアニストの声かけで第1回目のように児童たちはピアノの周りを囲んだり、下にもぐったりして聴いた。下にもぐってフルコンサートグランドピアノの音を頭から浴びた子は、響いた体の感覚を忘れられないだろう。

《カノン》では、児童らは舞台の上へ上がってピアノの周りに輪になり、8人ずつ順番に、Tとサポーターの手引きによって低音部の繰り返しをハンドベルで演奏。一人ずつ現れる弦楽器奏者と徐々に壮大になる音楽のコラボレーション。ホールの重厚な響きの中で皆が思いを合わせて演奏するという実感は舞台の緊張感と共に忘れられない体験となったに違いない。担任は「多分、一生に一度の歴史的体験」と評価した。

4. 第1次調査報告と考察

4-1 児童のアンケート集計結果（対象は33名で有効回答数は33名、有効回答率は100%）

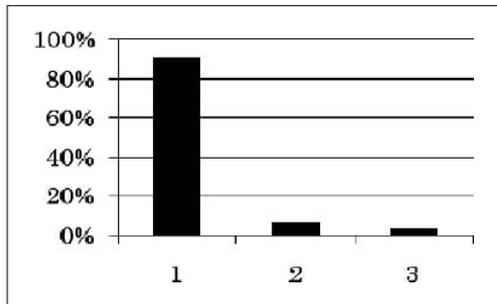
今回参加した児童を対象に、アウトリーチが終わった直後の3月にアンケート調査を実施し、同じく参加した担任教諭と音楽科教諭に対してはアンケートと聴き取り調査を行った。（筆者の他にTAN職員1名も同席した）

① 今回のアウトリーチについてどう思ったか。（図1）

1) とても感動した。今でもワクワクする。

- (30) (91%)
 2) つまらなかったし、心に残らない。(2) (6%)
 3) どちらでもない (1) (3%)

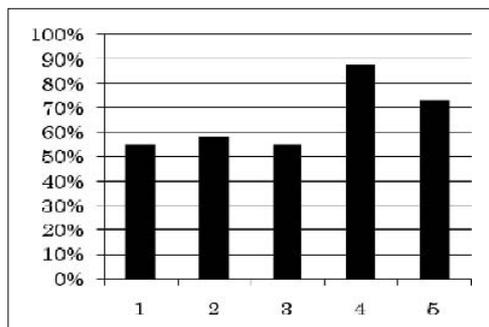
図1 今回のアウトリーチについてどう思ったか。



② 面白かったのは？ (複数回答可, 図2)

- 1) 第1回目 (18) (55%)
 2) 第2回目 (19) (58%)
 3) 第3回目 (18) (55%)
 4) 第4回目 (29) (88%)
 5) 第5回目 (24) (73%)

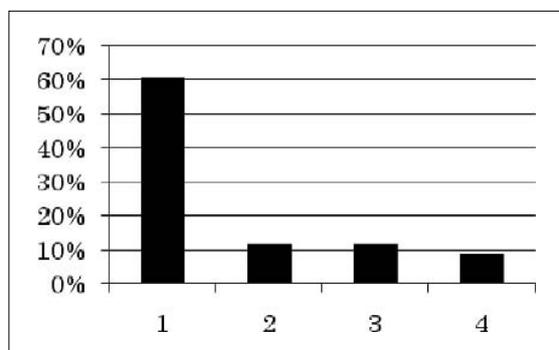
図2 面白かったのは？



③ クラシックの演奏会の経験 (図3)

- 1) 一度もない (20) (61%)
 2) 1, 2回ある (4) (12%)
 3) 3回以上ある (4) (12%)
 4) 良く行く (3) (9%)

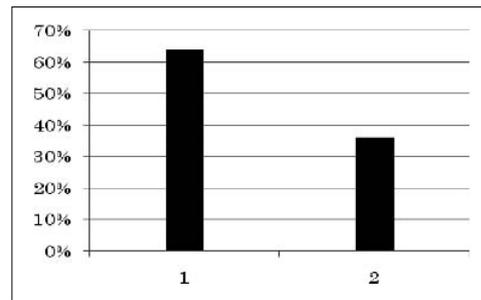
図3 クラシックの演奏会の経験



④ 何か楽器を習っているか？ (図4)

- 1) 習っている (21) (64%)
 2) 習っていない (12) (36%)

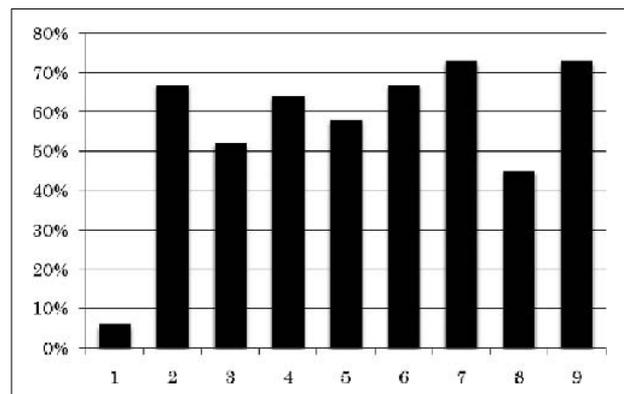
図4 何か楽器を習っているか？



⑤ あてはまるものに丸をつける。(複数回答可, 図5)

- 1) あまり感動しなかったしよくわからないから、また聴いてみたいとは思わない。(2) (6%)
 2) 今まできちんとクラシックを聴いたことはなかったけど、もっと聴いてみたいと思った。(22) (67%)
 3) 一生懸命に努力すると、あのよう素晴らしい演奏ができると思い、自分も勉強やスポーツなど自分に出来ることを頑張ろうと思った。(17) (52%)
 4) 自分も参加して、みんなと協力して演奏することができてうれしかった。(21) (64%)
 5) 目の前で演奏を聴いたので、演奏者の息遣いや人柄などを感じ、飽きずに楽しめた。(19) (58%)
 6) 楽器の響きを身体で体験して、音楽の面白さがわかった。(22) (67%)
 7) CDやテレビで聴くより、音楽が生き生きしていて、違うと思った。(24) (73%)
 8) 集中して聴いたので、色々なことがわかった。(15) (45%)
 9) これからも機会があればクラシックの演奏会に行ってみたいと思う。(24) (73%)

図5 あてはまるもの



4-2 アンケートにおける自由意見

アンケートにおける子どもたちの意見には率直な気持ちが見られる。それらを①意欲②感動③関心④想像力⑤共感性⑥無関心の6種類にカテゴリー化することにより考察を加える。

【①意欲】

・管楽器を始めて7ヶ月たった時は「めんどくさいな」と思ったけれど、アウトリーチコンサートを聞いてがんばろうと思いました。ありがとうございました。

- ・クラシックには、あまり興味がなかったけれど、またききたいと思いました。めずらしい楽器ばかりでうれしかったです。
- ・私はホール（トリトン）の演奏会によく行っているのので、いつかあのピアノで弾いてみたいと思いました。どうしてかという、あのピアノはすごく音が好きだからです。お母さんに言ったら「ずる〜い」と言っていました。
- ・5年生でもアウトリーチコンサートがあったらいいなと思いました。
- ・楽しかったから、もう1回だけ聞きたいと思う。
- ・僕はコンサートを見ていたら、ほくもいろいろな楽器をやってみたいと思いました。

【②感動】

- ・すごく迫力があって楽しかった。
- ・音楽は苦手だったけど、好きになれた。とても感動した。
- ・演奏している人の顔を見ると、すごい迫力だなと思いました。
- ・生で、弦楽四重奏は、はじめて。生で聞けてよかったです。
- ・私は最初にアウトリーチコンサートは1回だけだと思いましたが、5回もアウトリーチコンサートができてとても良かったです。はじめてこんなすばらしい演奏が聞けてとてもよかったです。このアウトリーチコンサートはとても心に残りました。
- ・ピアノ二重奏と、木管五重奏が迫力があってすごかった。
- ・生で、大人の人が演奏しているのは、はじめて見たのですごくいいと思った。
- ・トリトンホールへ行って本当のホールに行ったような感じで、とっても感動しました。また聞いてみたいです。

【③関心】

- ・楽器はいろいろな音がでて、とても楽しいものだと思います。それに音もいい音でした。
- ・どの楽器の音も、どの演奏家も生き生きとしている感じがして、よかったです。ピアノのしくみなど、いろんなことがわかってよかったです。ありがとうございました。
- ・チェロの弦が馬の腸だとは、びっくりしてしまいました。
- ・音楽家は自分で音楽を作ると言うので、すごいなと思いました。
- ・マリンバの演奏はマレットを3本持ってひいていたので、すごかったです。4回目の木管五重奏の演奏はどの楽器もきれいでした。
- ・チェロの弾くぼうがひつじのしっぽだった。
- ・ピアノのけんばんがおもしろく動いていたのが、おもしろいと思った。
- ・ピアノ五重奏のドボルザークがおもしろかった。

【④想像力】

- ・音楽を聞くときはたのしくて、なんかのはなしにつつまれているようです。

【⑤共感性】

- ・一人で音楽を聞くよりも、皆で音楽を聞く方がいいと思った。皆で演奏をする方がいいと思った。

【⑥無関心】

- ・あんまりたのしくなかったから、たのしめなかった。

4-3 考 察

児童のアンケートからわかることは、学校で管楽器クラブなどに所属したりピアノを習ったりしている児童は64%だが、クラシックの演奏会に行った経験が「一度も無い」か、「1〜2回」という児童が73%で、都心に住んでいてコンサートホールは近隣にたくさんあるが、クラシックの生演奏に接する機会があまり無いことがわかる。しかし、今回のアウトリーチで「とても感動した」と答えた児童が91%、「もっとクラシックを聴いてみたい」が67%、「クラシックの演奏会に行ってみみたい」が73%で、児童たちが高い関心を寄せたことがわかる。

TANの狙いには「音楽カリキュラムに即した年間5回のアウトリーチを通じて、子ども達の芸術に対する意識の変化を探り、演奏家とより親密になりクラシック音楽を身近なものとして捉えてもらうこと」(TAN資料より)とあるが、今回のアウトリーチプログラムによってクラシック音楽と演奏家に対する心の距離感を確実に縮めたと言える。「CDやテレビで聴くより、音楽が生き生きして、違うと思った。」と答えた児童が73%で、音楽を今までと違って生き生きしたものとして捉えている。今回の体験によって心が揺動かされ、「音楽は苦手だったけど、好きになれた。とても感動した」(②感動)ので、「楽しかったから、もう1回だけ聞きたい」(①意欲)と思ったのである。

また「一生懸命に努力すると、あのよう素晴らしい演奏ができると思い、自分も勉強やスポーツなど自分に出来ることを頑張ろうと思った。」という児童が52%おり、「管楽器を始めて7ヶ月たった時は「めんどくさいな」と思ったけれど、アウトリーチコンサートを聞いてがんばろうと思いました。」(①意欲)という意見から、演奏家の奏でる音楽と共に演奏家の姿勢も心に残り、自分も前向きに頑張ろうという意欲が生まれている。

また「自分も参加して、みんなと協力して演奏することができてうれしかった。」と答えた児童が64%で、「一人で音楽を聞くよりも、皆で音楽を聞く方がいいと思った。皆で演奏をする方がいいと思った。」(⑤共感性)という意見から、共有感や協調性が育まれたことに加え、児童一人一人が役割を持って、演奏家と共演したという達成感が、それぞれに有用感を感じさせていることがわかる。

他に「すごく迫力があって楽しかった。」「演奏している人の顔を見ると、すごい迫力だなと思いました。」「ピアノ二重奏と、木管五重奏が迫力があってすごかった。」「生で、大人の人が演奏しているのは、はじめて見たのですごくいいと思った。」(いずれも②感動)「どの楽器の音も、どの演奏家も生き生きとしている感じがして、よかったです。」(③関心)などの意見は、アウトリーチならではの感想であり、相手が目の前にいる体験によって、生命力溢れる音楽体験が児童の心を揺さぶっているのが分かる。「音楽は苦手だったけど、好きになれ

た。とても感動した。」(②感動)という意見は、感動することによって音楽に対する考え方が変わったことを表している。しかし僅かながら「よくわからなかったから感動しなかった」(⑥無関心)という意見の児童がおり、そのような児童に対しては何かフォローやアプローチの方法が無かったかどうか、検討してみる必要があるのではないだろうか。そのようなことも含め、後日に振り返る時間を取り、次回につなげることが好ましいと思う。

5. 教師・演奏家・サポーターの視点

5-1 教師の視点

今回のプロジェクトで学校側は、過去の経験からTANに信頼を寄せており、積極的に協力をする態勢にあった。Tの要望に対し、出来ることは何でも協力し、一緒に良い結果を出そうとしていたため、結果的には教師も児童達と一緒にアウトリーチを楽しむ姿が見られた。

まず、音楽科教諭は4回目のアウトリーチの時に児童達の変容を感じている。

「子どもたちは「動物の謝肉祭」にかなり気持ちを入れ込んでいたようです。教室での姿勢、座り方にも変化が見られた。意識化されてきている。」(アンケートより) 4回目は児童も出演者と同じ立ち位置に立って、一つの演目を作り上げようとする期待感が膨らんでいた。そのため自ずから背筋が伸び、意欲が溢れていたと言える。彼らは持てる限りの感覚を研ぎ澄まし、音楽と動きと語りの連携の中に位置していた。

そして今回のアウトリーチにおける教育的効果については、次のように述べた。

「第一にコミュニケーション能力だと思います。学校関係者以外のスタッフの方々や演奏家の方々と5回も接することができ、その中で子ども達一人一人が自分の中の世界を広げることができたと思います。その出会いが楽しく、心が解き放たれるような体験を通してであったことが、さらに豊かな体験として記録されたことと思います。音楽を聴くことは、知らず知らずのうちに思考力(の基になるもの?)を育てているのだと思います。体全部で、音楽を丸ごと受け取り、自分の体をくぐって、思ったこと、感じたことを言い表さないまでも、振り返ること、意識することで、記録されるのだと思います。」(同)

さらに「受身というか、聴衆の席というのではなく、ほんとにもちろんそういう風に聴く場面と、その中に子ども達一人ひとりが入っていった、共演、そういう場面をたくさん作ってくださったことと、耕すというか、その子の感性を揺さぶるような、子どもたちの心に触れるような、そういう取り組みがたくさんちりばめられていた。」「子ども達が今まで、不協和音の音楽を聴いたり、すごく激しい音楽を聴いたり表現していたけれど、子ども達が未知の世界に、連れて行ってもらえたというか、それはすごく大きなことだと思う。」(同)と評価している。

また担任教諭は、「演奏家との触れ合いで、大人に対する接し方と、何よりも大人の演奏家の持つすばらしさに触れることができた。子どもたちが教室に戻ってきた時に、ものすごいエネルギーを感じたので、いかに音楽

を楽しんできたかを感じた。」と述べている。

さらに、子どもたちの学力については、「3年生から4年生あたりで抽象的かつ論理的な学習に入った時に、理解できず学習が嫌になる場合があるが、そこを何とか頑張って乗り切ることが鍵となる。乗り切するためには読解力や思考力が必要となるが、現在の国語の授業では物語文を扱う時間が少なくなっているため、“心情や情景を読み取る力”や“自分の頭で考えて文章化・音声化する力”が不足する傾向にある。」と述べている。すなわち、目に見えないものに集中して、自分の中で想像して何らかの気持ちを感じ取る、表現する、というのは音楽も同じである。音楽科の教諭が「音楽を聴くことは、思考力(の基になるもの?)を育てていると思う」と述べていることも、音楽で培った力が、他の教科に生かされることを示唆している。

今回の取り組みについての教師の視点を整理すると以下ようになる。

- ・知識としての音楽だけではなく、興味を持たせることに成功していた。
- ・音楽は人とのつながり、ということが見えた。
- ・楽器が豊富で素晴らしかった。
- ・子どもが入り込める場面がいくつも用意されていた。

今回のアウトリーチでは、教師は児童に対しての成果を評価しており、教師自身も演奏家からの学びがあったと思われる。

5-2 演奏家の視点

今回のプロジェクトで始めから終わりまで一貫して関わった演奏家Tは、ギルドホール音楽院ピアノ科を首席で卒業後、シティ大学院音楽学部修士課程を修了、1998年より母校のギルドホール音楽院でパフォーマンスフェローとして2年間勤務、帰国後、財団法人地域創造の公共ホール音楽活性化支援事業アーティストとして、アウトリーチの経験を多く積むほか、コンサート活動も多く行っている。

今回のアウトリーチでは、「音楽を多角的に照らし、子どもたちがいろいろな立ち位置に立って音楽の楽しさを得られるように、子どもたちの土俵に入り込んで、自分たちのテリトリーに巻き込みながら、音楽の楽しさを伝えたい」(インタビューより)とTは考えていた。

サポーターからの提案による〈子どもとの連絡帳〉も実施、毎回児童全員からのコメント全てに返事を書き、児童の名前と顔を一致させ、より身近に子どもたちを感じようとしていた。5回を経て、「子ども達のコメントが、感じたことをよりの確に、具体的に表現できるようになっていたことがとても印象的だった」と語った。

また毎回ゲストに演奏内容や手法についてアドバイスを求め、話し合い、Tは結果演奏家と聴き手が、音楽を楽しみながら共有する空間作りを精一杯心がけた。普段は1回で終わるアウトリーチだが、今回は5回ということで、次につなげる工夫と、学校側の要望をうまく組み込まなければならぬ責任を感じながらも、「毎回の連絡帳で児童から寄せられる“次のアウトリーチが楽しみです”“次は、もっと楽しいアウトリーチにして下さい”という言葉に刺激を受け、期待に応えようと知恵を絞り

続け、結果的には、自分の能力も伸ばしてもらった、やり甲斐と達成感を感じた一年だった」と振り返る。

さらに「アウトリーチとは、皆のすぐ傍らにあって良いものであり、そこで音楽と出会った人が、願わくば、そこで感じた好奇心を伸ばしていく次の段階に進み、より身近に音楽を聴くことを自分の喜びとする人が増えていくことが願い」と述べ、「演奏家として、音楽と共にある楽しい空間を提供し続ける努力をするべき」と語る。「演奏家だからこそ、皆と共有できる音楽や、音楽空間があるはず。教育現場など、必要とされている場所に出かけていくことも、音楽家の使命」と考えている。

アウトリーチという場で、多くの子どもや大人たちと関わり、音楽で真剣勝負するという事は、演奏家にとっても演奏の質や幅を広げる良いチャンスであると言える。Tにとっても今回の取り組みは成長の場となった。

5-3 サポーターの視点

今回のプロジェクトに関わったサポーターは、様々な職業や立場におり、しかしアウトリーチに対して魅力と必要性を感じている人々である。プロジェクト終了後に次のような意見を得ることが出来た。

- ・演奏や人間性など様々な側面を見ることが出来た。
- ・子どもたちが演奏家の人間性に近づいた。サポーター側は、学校側の色々な人と関わり理解し合えた。
- ・子どもたちも生きた関わりを回数重ねて持ったことで、他者理解を深めることにつながった。
- ・本物を知る＝大人が本気になってやっていることを身近に知ることは大切。
- ・子どもたちが、“どうしてこれをしなければいけないのか”“これがどのように役に立つのか”を理解していない。それらに気づく体験となる。すなわち勉強したくなる【体験の必然性】である。
- ・演奏家のようにになりたい、と憧れを持つことは必要。
- ・今回のようなプロジェクトは、現時点では夢のような企画であり、これらを日常化していくには、たくさんの壁がある。

これらを見てもわかるように、通常の音楽の授業や、コンサートホールでは得られないような体験を、子どももサポーターも得ていることがわかる。しかも今回は継続して行ったことで、児童達に大きな変容が読み取れたことは大きかった。本気になって取り組む大人の姿を間近に見る体験は、子ども自身に学ぶ意欲を喚起し、将来に向かって希望や向上心を持ち続ける良い機会となると考えられる。しかし、いくら良い企画であっても、実行していくための人的資源や資金など、多くの課題があることが指摘された。

第2部 追跡調査—第2次調査報告と考察—

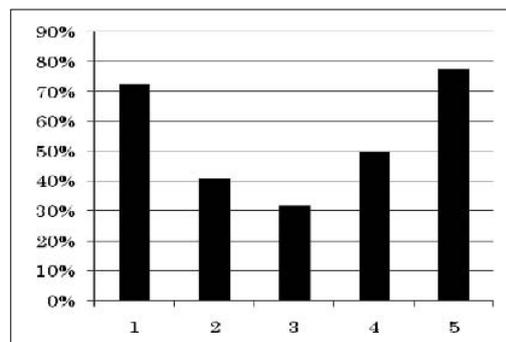
当時4年生だった児童たちは今年6年生になり、音楽科の教員は新任教諭を迎えた。その後の児童たちの様子を把握するために、再度児童へのアンケート調査と新任音楽科教諭への聞き取り調査を実施した。(アンケート調査は音楽科教諭に依頼(2009年7月実施)、聞き取り調査は同年6月にTAN職員1名同席にて行った。)

1-1 児童のアンケート調査と考察 (対象者は22名で有効回答数は22名、有効回答率は100%)

① 2年前のアウトリーチプログラムで、良かったものは次のうちどれですか？(複数回答可、図6)

- 1) 第1回 (16) (73%)
- 2) 第2回 (9) (41%)
- 3) 第3回 (7) (32%)
- 4) 第4回 (11) (50%)
- 5) 第5回 (17) (77%)

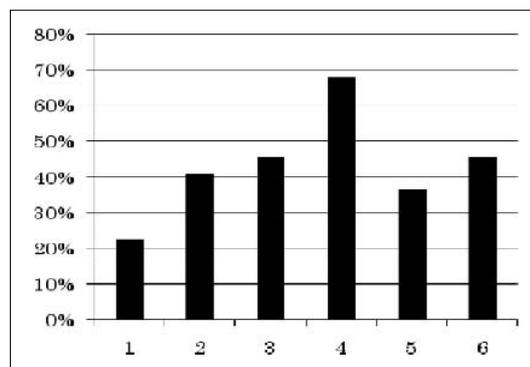
図6 良かったものは？



② 印象に残ったものは何ですか？(複数回答可 図7)

- 1) Tさんのお話 (5) (23%)
- 2) 音楽絵本(スイミー, スノーマン) (9) (41%)
- 3) 第一生命ホールでの「カノン」(10) (45%)
- 4) 動物の謝肉祭 (M動物園編) (15) (68%)
- 5) 演奏された曲 (8) (36%)
- 6) 楽器 (10) (45%)

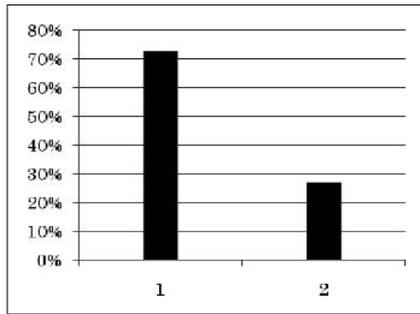
図7 印象に残ったもの



③ アウトリーチを経験してからクラシック音楽の演奏会に、行く機会がありましたか？(図8)

- 1) 何回か行った (16) (72%)
- 2) 行かない (6) (27%)

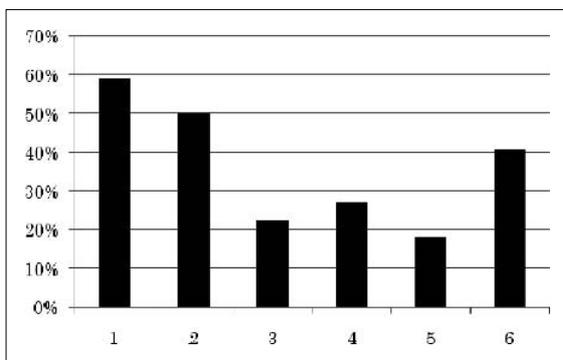
図8 演奏会に行ったか？



④ あてはまるものに丸をつけてください。(図9)

- 1) 演奏を聞いてとても感動したから、もっとたくさんアウトリーチがあると良いと思う。(13) (59%)
- 2) CDと違って、アウトリーチは音楽が良くわかっておもしろいと思う。(11) (50%)
- 3) クラシック音楽の良さがわかったので、時々CDやテレビでも聞くようになった。(5) (23%)
- 4) 音楽は見えないけれど、自分の中にイメージできる感じがした。(6) (27%)
- 5) 演奏家はすごいな、と思ったから自分も毎日努力しなければ、と思った。(4) (18%)
- 6) みんなでつくる音楽は、楽しいと思った。(9) (41%)

図9 あてはまるもの



(自由記述)

- ・CDと本当に違ったのでびっくりしました。
- ・アウトリーチがまたききたいと思いました。

これらのことから分かることは、時間を経過しても、アウトリーチに対する期待値が依然として高いということである。つまり、「CDと違って、アウトリーチは音楽が良くわかっておもしろいと思う。」と答えた児童が50%、「演奏を聞いてとても感動したから、もっとたくさんアウトリーチがあると良いと思う。」と答えた児童が59%おり、アウトリーチによる感動が大きかったことを表している。「CDと本当に違ったのでびっくりしました。」という意見や「アウトリーチがまたききたいと思いました。」という意見も、生演奏が児童の心のひだにしっかりと入り込んでいることが分かる。

また、アウトリーチを体験する前はクラシックの演奏会に行ったことがない児童が61%、行ったことがある児

童は38%だったが、その後クラシックの演奏会に足を運んだ児童が72%で行かない児童の27%を大きく上回り、高い関心から実際の行動に移していることが分かる。子どもにとって、クラシック音楽の演奏会は堅苦しい印象を抱きがちだが、この児童たちは積極的に聴きに行こうという態度を獲得していると言えるのではないだろうか。

また、良かったものとして第5回のプログラムを挙げている児童が77%で、時間が経って思い出すのは、冒頭にあげたような《カノン》のコラボレーションにおける感動や達成感、ホール空間で耳を傾けた一流の演奏と本物の響きが、今も児童の心の中にとどまっていることを示していると考えられる。

さらに、第1回目のプログラムも73%の児童が支持しており、ピアノという楽器に対するイメージがTによって覆され、魅力ある音色やダイナミックな響きなどを体感したことが、強く印象に残っているのではないだろうか。

しかし、第4回目のプログラムも児童にとっては忘れられないプログラムであり、印象に残ったものとして68%の児童が「動物の謝肉祭 (M動物園編)」を挙げている。学校の日常空間である音楽室で、単に鑑賞する立場だけではなく、ひとりひとり役割を持って他と関わりあい、音楽とともに自分を表現した経験が忘れがたいものであると推察できる。その場限りの楽しさだけではなく、共有感、達成感、幸福感など多くのものが育まれたのではないかと。

演奏家やサポーター、そして児童が一体となって1つの演目を作り上げるということはなかなか経験できることではない。Tの発想は素晴らしい結果を生んでいると言える。同時に、コーディネーターであるTANやサポーター達の立ち位置も、支援者として適正なものであった。

1-2 音楽科教諭への聴き取り調査

音楽科教諭に対しては、児童たちが進級して5年生になった時に赴任してきているので、実際のアウトリーチプロジェクトには参加していないが、児童たちを見ていて感ずることなどを中心にインタビューを行った。

まず始めに音楽科教諭が述べたのは、児童たちの態度についてである。

「私が出会ったのは去年、5年生の時ですが、1年生から6年生まですべて教えている中で、この学年は授業に対する態度・意欲が、まず違うな、ということを感じていました。6年生も最上級生らしく意欲的に学習はしていますが、5年生の方が本当に静かに落ち着いて授業に臨んでいるという姿勢、態度が学校内で一番素晴らしかった。本当に、静かに音楽室に入ってきて、今日の授業は何を勉強するのかな、ということを実際に子どもたちが楽しみにしている様子が毎時間感じられて、私も授業をととても楽しみにしている学年でした。」

このことは当時の5年生の児童たちの態度が他のどの学年よりも意欲的で落ち着いていることを表しており、これは継続的なアウトリーチを経験したことで獲得した態度であると言えるのではないだろうか。

また、「楽器を使った合奏に取り組む時には積極的に

立候補し、与えられた楽器を休み時間も練習する児童が多く見られるようになった。」と述べ、教師にとっても、やりがいのある授業が展開出来たことが推察できる。

そして「音質とかメロディーラインとか、例えば打楽器はここはずれちゃいけないとか、裏拍がこの曲は大事なんだとか、そういうところをどんどん出してくれるのが、この子たちだなあとします。音楽的にも深く掘り下げて、取り組めるような、意欲は持っていますね。アウトリーチは目の前でプロの演奏が聴けるということで、本当に子どもたちが楽器の本物の音を知っていると思います。」と語っていることから、目標や理想となる音楽や音が児童たちの中にあるということが読み取れる。つまり演奏家の奏でた音楽やその姿勢が、鮮明な記憶として残り、児童たちの中で育っているということが考えられる。

また、「アウトリーチ活動を通して本物を覚えている。身を持って体験したことを覚えている。それを自分の音楽体験にすぐ活かせるということは、やはりアウトリーチを体験した子どもたちならではの強みではないかと思いました。」と語ったことは、ダルクローズが述べている、筋肉感覚での理解、すなわち体全体で音楽を感じ取ることや表現する訓練によって知的能力や意欲が高まり、人格が発達する、ということと関連して、実際の体験が児童たちの行動の裏付けになっていると考えられる。

そして、「アウトリーチと言えば、心に直接訴えかけてくるものですので、子どもたちにとって音楽という教科は、やはりプロの演奏を聴いて初めて感動するというか、先生がいくら歌っても、やはり本物の声楽家の方がいらしたら、それだけでも感動するし、子どもたちの一生の思い出になりますし、全然違います。」と、演奏家によるアウトリーチを高く評価している。

また、「身近な音楽を、例えば就職したら収入の5%はCDを買うとか、コンサートに行くとか、そういう人に育ってほしいと思います。絶対自分の心の支えになるし…。」と述べ、音楽との関わりによって豊かな生活観を身に付けてほしいと考えている教諭は、「小学生の時の体験というのは何物にも代えがたいですね。人間としての素地が出来上がるとか基礎が培われるとかいうのは、やはり小学校の教育かなと思います。」と述べ、この時期の教育における音楽の在り方が、とても重要な意味があると考えている。

実際、小学校以降の教育では受験も視野に入るため、音楽や美術などの教科はどうしても捨てがちになる。小学校は音楽との関わり方やスタンスを身に付ける最適な時期と言えるのかもしれない。

ところで新学習要領には『自分の思いを伝える』という単元が入ってきており、鑑賞した後に感じたことや、演奏する際にはこのような思いを持って演奏するのか、などの「思い」や「意図」を持って取り組まなければならない。このことに対しても教諭は「アウトリーチの体験があればこそ、子どもたちはつかみやすくなるのかな、と、感じています。」と述べている。

しかし、アウトリーチの実施に対しては今までも、システムが良く分からないため、スムーズに行えていなかったようである。

「本当は学校の一教員が本物体験のプロの演奏家を呼べたら一番良いのですが…。まだちょっと壁がありますね、敷居が高いといえますか、どうやったらアーティストの方とうまくやり取りできるのかと…。」と述べ、戸惑いや不安を見せている。学校の教員は授業以外に生徒指導や学校行事など多忙であることが多く、その中で慣れていないプロの演奏家との交渉は困難を極めることは予想できる。しかし、今回のケースではTANが演奏家と学校側との橋渡しを行い、お互いが理解し合える状態を作り出すことに専念していた。おかげで、演奏家は勇気を持ってチャレンジすることが出来ていたし、学校側は気持ち良く協力することが出来た上、演奏家をより理解し、一緒になって楽しんでいたと思われる。

以上のことから、音楽科教諭は5回のアウトリーチを経験した児童たちの積極的な学習活動について「やる気が全然違います。」と、高く評価しており、児童たちの意欲や向上心が継続的なアウトリーチによって高まったことが確認できた。しかし、一般的には音楽家教諭が演奏家との協働を行うことは難しく学社連携の在り方が今後の課題であることも明らかになった。

おわりに

実践を積み重ねてきたトリトン・アーツ・ネットワークは、演奏のクオリティに妥協せず、しかし常に演奏家の立場に立ち、受け入れ先との温度差を埋め、良いものが作り上げられるように準備のプロセスを入念に行ってきた。実務を担うコーディネーターにはこのような態度が望まれる。トリトン・アーツ・ネットワークの理念である「音楽が住む人たちの生活の中に常在する環境の中、弾き手も聴き手も、顔の見える関係で、ともにアーツが持つ豊かさと価値を享受する、というのが一つの理想の姿」という考え方は、社会全体の姿として理想である。

ところでアウトリーチは演奏の質とともに人間性が問われる場でもあるが、現状においてはアーティストが研修を受ける機会は少なく、動機や意識、手法にも幅があり、その質を問うことは難しく、演奏者本位であったり、娯楽的で心に残るものが少ないアウトリーチも一般的には存在する可能性もあることを指摘しておきたい。そのような点から考えても、今回の取り組みは有意義で貴重なケースであった。

今回のT小学校の事例を整理すると、以下のようになる。

- ① 5回継続して行ったことで、児童の期待感の高まりと共に音楽に対する意識や理解が深まった。
- ② 演奏家との会話の積み重ねや連絡帳などの心の受け渡しによって、演奏家の人間的魅力が、子どもの音楽受容を促し、クラシック音楽を身近なものとして受け入れることが出来た。
- ③ 高度で難易度の高い芸術音楽を演奏する演奏家の努力や姿勢を目の当たりに見て、児童自身の向上心が刺激を受け、学習意欲が喚起された。それによって、授業に対する意欲や落ち着いた態度を獲得した。
- ④ 音楽をベースとした人間同士のコミュニケーションや心を重ね合う体験によって、共感性を高め、他

者理解につながった。

一方演奏家にとっても、継続していく中で、子どもたちから意欲をもらい、演奏や人間的幅を広げる機会になったことは間違いない。そして学校側にとっても、大きな結果を見ることとなり、改めて演奏家の力を学校現場に持ち込むことのメリットを確認したと思われる。

今回の事例を考察した結果、演奏家と学校の協働によるアウトリーチは音楽教育の可能性を広げ、学校教育の充実につながるものであることがわかった。今回は、クラシック音楽の専門家による事例であったが、音楽の本質は邦楽でも民族音楽でも、どのジャンルの音楽も変わらない。その精神性と豊かな音楽性を以て子どもたちの心に感動を与え、喜びと意欲を引き出すアウトリーチは今後ますます重要になり、かつ多様な役割を担うであろう。

謝 辞

論文を作成するに当たり、ピアニストT氏、特定非営利活動法人トリトン・アーツ・ネットワークS氏と当時のディレクターM氏、サポーターの方々、中央区立T小学校の先生方に多大なる御協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

注

- 1 「芸術普及活動」や「出前教室」「教育普及活動」と呼んでいる団体もある。
- 2 井原三保「えんれん」日本演奏連盟2005年7月15日号より
- 3 2008年日英共同シンポジウム「アウトリーチのこれから—ロンドン交響楽団“ディスカバリー”プログラムをもとに—」の講演内容より
- 4 三井(2002)は次のように説明している—美しいものや芸術性の高い美術作品、あるいは魅力的な人に会うときめき、感動する。このように人を惹きつけるものを受け入れる感覚器官の感受性を感性と呼んでいる。(中略)日本語の「感性」には豊かな感受性や感覚によってよび起される感情や衝動、欲望という感覚や、英語やドイツ語にはない「うるおい」「やすらぎ」「数寄・風流」「幽玄」などの心理的付加価値のある意味が含まれている…(pp.194-195)。また片岡(1990)は「価値あるものに気づく感覚(p.75)」と述べている。
- 5 中央区は、皇居の東側、東京駅に隣接して広がり、銀座をはじめ日本橋、築地、人形町、晴海、兜町などのエリアがあり、古くから商業地区として発展し、現在は下町の風情と高層ビルが混在する街並みとなっている。

- 6 AIR：国内外からアーティストを一定期間招聘して、滞在中の活動を地域社会や団体が支援する事業。1950年代から60年にかけて欧米で形成され、日本では90年代から地方自治体が担い手となって行われ始めた。97年には文化庁地域振興課(当時)が〈アーティスト・イン・レジデンス事業〉を開始。(菊池 2006)
- 7 スクリーンに絵を映し出し、語りにピアノの生演奏を組み合わせた田村のオリジナル作。
- 8 自分の隣に座った人と話をして、その人についての紹介を皆に発表する。

引用・参考文献

- 片岡徳雄(1990)
『子どもの感性を育む』日本放送出版協会。
- 神原雅之(2006)
『“体を楽器”にした音楽表現「リズム&バームにとっぷり！」リトミック77選』明治図書出版
- 神原雅之(2007)
『アクション&ビートでつくる音楽鑑賞の授業』明治図書出版
- 佐野靖・茂呂雄二監修(2006)
『実演家が学校にやってきた 和楽器授業ガイドブック』日本芸能実演家団体協議会。
- 清水裕之・菊池誠編著(2006)
『新訂 アーツ・マネジメント』放送大学教育振興会。
- デューイ・ジョン(1957)
『学校と社会』宮原誠一訳、岩波書店。
- デューイ・ジョン(2004)
『経験と教育』市村尚久訳、講談社。
- ダルクローズ・エミール・ジャック(2003)
『リズムと音楽と教育』板野平監修、山本昌男訳、全音楽譜出版社
- ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ(1999)
『音楽的成長と発達—誕生から6歳まで—』神原雅之ほか共訳、溪水社。
- 林(近藤)睦(2003)
『音楽のアウトリーチ活動に関する研究—音楽家と学校の連携を中心に—』大阪大学大学院研究科博士論文
文部科学省(2008)「小学校学習指導要領解説 音楽編」
教育芸術社。
- 三井秀樹(2002)
『メディアと芸術』集英社。
- 茂木健一郎(2008)
『すべては音楽から生まれる 脳とシューベルト』
PHP研究所。
- TANアウトリーチハンドブック制作委員会(2007)
『アウトリーチ ハンドブック』パンセ・ア・ラ・ミュージック。